

會



報

1951年7月

156

日本山岳會

國民體育大會
登山特集號今年度國體登山
に望むもの

灘波清一

各競技團體の非常な熱意と努力によつて國體復歸も次々と實現せられつゝある折、我々登山部門がひとり國內で脾肉の歎をかこつてゐるのも遺憾なことである。

我々も今年あたりから雌伏の準備時代を過ぎてそろそろ實行雄飛の時代に入らなければならぬのであるから、この際一度我々自身を省みて自己の力を知り、じつくりと地についた計畫を打樹て、時に到るをまつか或は自ら機會をつくつても國際場裡に乘出す覺悟を新にすべき必要を痛感する。

そこで我々は今年の國民體育大會にも、大いに此の氣構えを反映させたいと希うものであり、我が山岳會にとつて恒例のこの行事を例年よりもより以上意義あらしめなければならぬと思う。

本年度の國民體育大會は来る十月二十七日より五日間、山陰の大山に於て開催される運びとなり、地元當局及山岳會支部の盡力によつて會場其他の準備は既に十二分に整えられている。

日本山岳會も國體の行事に回を重ねること數回に及び、自己反省を繰り返してその企畫と實施の兩

面に幾多の改良を加えて來たのであるが、登山スポーツそのものが他の競技と比較して本質的に異なるものがあるため、國民體育大會の主旨をいかにしてその實施面に具現させるかという點に常に多大の苦心を拂わなければならぬ。

此の度の限られた舞臺と、限られた日數に於て、計畫された山行そのものは或は技術的に或は量的に物足りない感があるかも知れないが、要は各地方より選抜された代表各位が本部の意圖する處を充分諒解され、過去一年間に互に各地方の山行に於て遂げられた業績の總仕上をされる様協力されることとが目的達成の唯一の道である。

山登りは多分に主觀的なスポーツであるということが長所でもあり又短所でもあるので、そのため統一競技團體として組織づけ難い。日本山岳會の如き中央團體は各地方團體の登山に對する考え方を統一するものではあり得ないが大局的見地から一つの登山者社會或は登山界というものは自ら其處に有機的な組織を有するものであつて、中央團體は自ら指導の立場を持して全體の向上發展を推進すべき責務を持たなくてはならない。そこに本會存続の意義を見出し大會本部の抱負も生れてくるのであつて、國民體育大會という絶好の機會を捉えて、我々のなすべきことは餘りにも重大であることとを知るのである。

各團體は夫々リーダー統率の下に自己の姿をありのまゝ披露して、之に批判を仰ぎ他の長所を觀察して打解けて教を乞ふと共に、快く自ら信ずる處を他に述べて、

山の様な大きな雅量を持つて行事を終始したいものである。兎角登山者は狭量に陥りやすいことを恐れるのはあながち筆者のみではあるまい。此の山行は小さくとも、奥行の廣いものにして先づ第一に考えるものである。

次に考えられるのは、技術向上の問題である。我々は敗戦後の苦しい世相下にも各々可能な最大限の山行を重ねて常に技術の向上を遂げて來たのであるが、顧みてホームグラウンドで常に同じリーダーの下に一つの決つた型にはまつた技術に偏してはいなかつたらうか。國民體育大會でもない限り或は永久に知る機もなく過ぎるかも知れない名山大山で、他の幾多の團體の貴い経験を見聞して新しい團を知ることは廣い意味の技術の向上に資する處極めて大である。

一口に登山技術と言へば直ちに岩壁登りの上手下手や、雪上登降の事と解し易いことは大なる誤りで、このようなことは先天的なスポーツ不適格者でない限り大差ない問題である。山登りは之等の個々の技術をいかに使い分けのか、という智的判斷力を伴つた技術を必要とし、限られた人間の對自然力をいかにして最大なものにするかということが問題なのである。

従つて廣く山を知ることが眞の技術の向上であつて、一つに経験から多くの教訓を學びることが最も大切である。

本部役員及技術役員(インスペクターを含む)は、この意味から綜合成績の認定を、どこまでも各團體自らには發見しにくい廣義の技術能力を正しく認識させるよう

に適切な指導を與えることを主眼として、懇切丁寧に處して行きたいと考えてゐる。従つて或る場合にはリーダーに助言もし、苦言もし、進んで要求する事もあり得ることと思われるが、この事は豫めリーダー各位もお含みの上眞意の程を汲みとつて協力して戴きたいと思う。

特に危險防止乃至は遭難對策に至つては、絶對的に其の場に處する指導役員の權限にお任せ願わなければならぬ。

自然の暴威は全部が全部偶發的なものではない。山の遭難の大部分はリーダーの判斷力の敗北にあるといつても過言ではない。惡條件に轉移する境界を見出すことが登山技術の最高の到達點で、自己のその時の力を知ると共に自然の力を測る事を常に忘れてはならない。近頃またや谷川岳の遭難が世の問題となりつゝあるにつけても、我々は一般登山者の指導にもつと積極的になるべきことを痛感している。

近頃我々登山愛好者の目に映り耳にする山の様子は、必ずしも登山團體のモラルが向上してゐないことをみとめなければならぬのであつて、我々は名譽ある登山團體の代表者であることをよく理解し、お互に切磋琢磨して登山道徳を美しく立派なものにしたいものである。

最後に望む處は、國體終了後各自の團體に歸つてから、今回得るであらうところの收穫を廣く普及させる事に一層の努力が拂われることを期待したい。國體擔當理事

第六回 國體登山の構想

佐野 勇 一

國民體育大會のありかたとか、或はその性格というようなことについては、今まで屢々論議されてゐるようだし、登山の場合も同様に、殊にその主動權などの問題とからみ合つて、色々な意見が出てゐるようです。唯登山の場合は、こういうことも考えてみなければならぬと思ひます。

一定の競技規則とグラウンドルールを持たないこの種目では、特に今の國體のように年々會場を移して行われることによつて、毎年毎回の都度、構想ややり方が違ふといふことは、當然起り得ることだと思ひます。要するに、その會場となる山によつて、年々そのやりかたが變つてゐることは、登山そのものの性格なり範圍からしても當然のことであつて、それ自體が議論の對象にはならないと思ひます。ともするとこういう點に、議論の焦點が持ちこまれることは、好ましいことではないと考へます。随つて今年の國體登山は、あくまでも、會場である「大山」を中心とした構想によつて、大山を活かす方向によつて考えられなければならぬと思ひます。

地元山岳會の我々が、最も苦しい山を思ふべきではないのは、この點だと思つてゐます。随つて山の位置・地形・氣候などはもとより、山の歴史・動植物・風俗等、登山家にとつて一應關心をもたれる事は、總てを検討してみ、その

中の大山の大山であるものを、多角的な登山の立場から一應ビッグアップしてみ、山を生かすことを考へてみたのです。それには、もともと大山は標高一七〇〇米餘りの山としてはスケールの小さいものであることに依りますが、大會といふと、從來はえてして競争意識にかられて、登山本來の多様性が忘れられがちなのを、此の機會に、山への味到といふことも考へてみたいと思ふからです。

同時に、スケジュールの盛りあげによると思ふのですが、從來、時間的にも行程の上でも、何かしらセカ／＼した忙しさで、自然お互いの神經をいらいらしてゐるのではないかと、思われるのですが、純粹な友情で結ばれなければならぬ岳人同志が、これでは切角全國から寄り集いながら、情ない氣がします。勿論我々自體には、それをどうしようという力はない、然し山を通じて、山をより深く味わふことによつて、當然より以上の友情が生れることを信じます。今年は廣島での開會式後からして、充分時間的な餘裕はもちたいと思つてゐます。

どんな山にでも難場や困難なルート、一つや二つ無いところはない筈です。勿論大山にも難場難コースは相當にあります。然し殊更にそういうもののみを採りあげるとは避けたいと思つてゐます。

それよりも、もつと和やかな楽しい山行であることを望んでゐます。氷雪とか岩場の高度な技術は勿論我々が究極の目標において、常に研鑽しなければならぬことであるし、又希求して止まないものでもあります。と云つて、それだけが登山の總てではない筈で、むしろそれよりも、こういう機會に、全國の岳人相寄り、同じ一つの山を對象として、日頃の技能を傾け合ひ、お互ひに研究し合つてもらひ度いと思ふのです。

どんなスポーツにしろ、技を爭う上には必ず、相手を理解しなければならぬといふ、確たる前提が横つてゐる筈です。自己本位な行動や思念のなかに、決してスポーツマンシップはないと云えましょう。今年の宿舎は、三晩とも同じ部落で同じ宿舎に、隣り合つて寝て頂くことにしてゐます。これはどのコースを行く人も、又見學團として来て頂く人も、全部一緒になります。古い寺や宮をもつた、もの寂びた部落ですが、この三晩の和みには、決して不自由はおかけないと思つてゐます。その代り、曾て行われたような、賑やかなお祭り気分は出ないと思ひます。何しろ貧弱な縣財政によらねばならない實情で、地方的な意義、或は國立公園としての觀光紹介といふような重大さも、充分に考へてはゐるもの、意有つて物足らずの齒擦ゆさを、既にしてかこつてゐます。

山陰の秋は暗いと謂われますが山は丁度満目紅葉の最中です。眼下四五里のところに、日本海から中海・宍道湖・島根半島・隱岐島

をめぐらして、この景観が、登山の疲れを癒し、参加者の心を慰めてくれることと思つてゐます。たゞ我々がひたすらに希ふものは、此度こそスポーツの祭典としての國民體育大會であり、知性ある岳人の集ひであつてほしいことです。細部の企畫構想については、

伯耆大山の國體登山について

港 叶

一、大山の豫備知識
第六回國體秋季大會の一部門である「登山」は、秋たけなわの頃に開催される。秋の大山、即ち紅葉の大山は毎年十月下旬から十一月上旬が最も良く、丁度國體は此の紅葉の眞最中に開催されるのである。

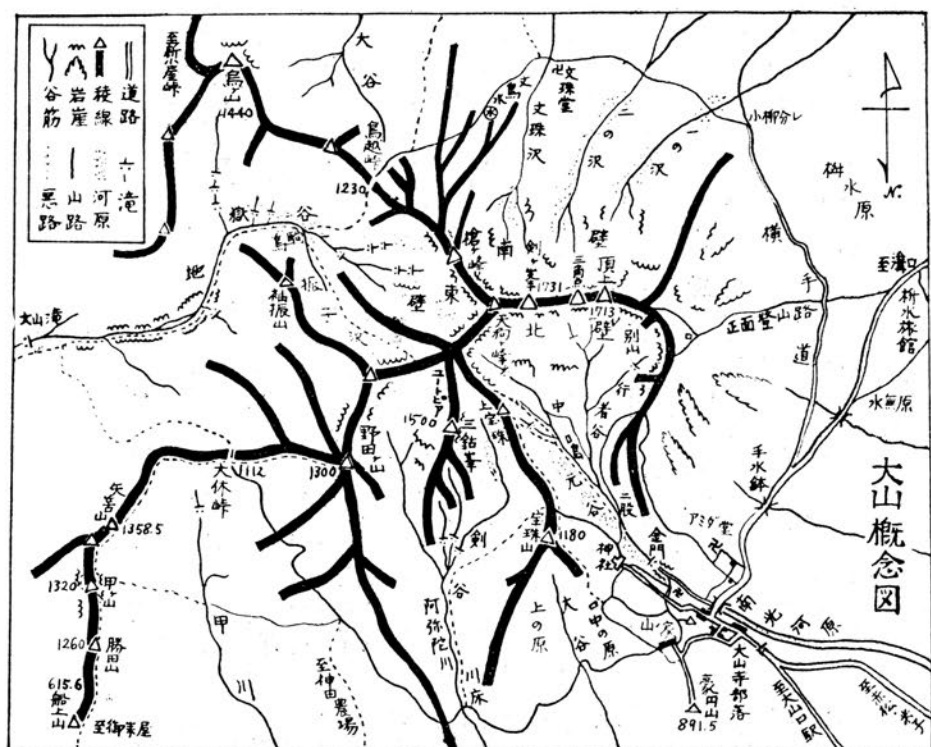
中國地方の最高峯と云つても、大山は標高僅か一七一二米で、高度の點から云つても日本の山岳では二級に屬する山である。但し山の高度感だけは海岸線から聳えてゐるだけに、正味の感じが味わえる。山の中腹位迄はブナ林で、それから上はブッシュ、草の順序である。年老いた山だけに、崩壊が烈しく、僅かの岩場をもつ北面とガレの連續する南面、東面は春の雪融けから梅雨期へかけて、年々其等の澤の小部分が變化する程、モロイ山である。残された西面だけ、なだらかな斜面を「伯耆富士」の名の如く、小規模ながら裾野の形をなしてゐる。

大山の秋の天候は、大體に於て晴天勝ちであるが、良く晴れた日の夜は霜が降りて若干寒さを感じ

これから更に練らねばならないし、又その都度後報によつてお知らせする考えで、以上は單なる希望ではなく、あくまでも今年の國體登山の、構想であり主題であると考へてゐます。(山陰支部長・國體擔當理事)

る。變りやすい秋の空、わけても山陰地方の山の天候は、絶えず變化があつて、ガス、雨、時には初雪のお見舞を受けることがある。近年、國體開催年には地元鳥取縣のオーブン登山を大山で行つてゐるが、毎年初雪の洗禮を受けてゐる。然し初雪と云つても、一二寸程度で特に問題とするに足らず、それも今年の國體は十月末日が閉會式の日程となつてゐるから、降雪の可能性が或いは無いかも知れない。

大山の登山口は普通三方向から取られ、米子、大山口、伯耆溝口の三驛がそれであるが、今回は溝口から入つて米子に下りるコースを取る。鐵道も山陰地方のこと故不便で車輛も上等ではないが、國體には廣島から臨時列車を運轉する。登山口への上下にはバスに便乗する。但し狭い悪い道路と、一流品でないバスには後め覺悟して戴きた。又今回基地となる大山寺は、わずかに三十戸許りの部落であり、昔の宿坊と門前町の部落の宿屋が殆んどを占めて收容力は約八百名を有つが、これも旅館に泊



る考えて來られては、ガツカリの態となるから、多くを期待しないように願いたい。然し乍ら地元鳥取縣としては、一枚看板の國立公園大山に關することであるだけに其の受入態勢には、あらゆる機能を總動員して萬全を期すべく、一

昨年から準備に邁進しつゝあるの
で、都道府縣代表の選手團は、見
學團も含めて、國體登山を意義あ
らしめるべく多數御參加願いた
い。そして日本全國山岳人の親睦
と知識の交換とをはかる一年一回
の此の國體登山を、最も有意義な

大山概念圖

登山會として全うしたいと考えている。

二、國體の實施概要

四回國體登山の實施概要は憶ふ所の結果、先般その案を會本提出したが、細部は兎も角と大體右の案によつて實施される豫定であるので、茲にその案の大略を述べてみたい。尙國體擔當理事難波氏が近く現地を視察され最後の決定をみる筈である。

今回の参加定数は各都道府縣七名、監督一名を含むであるが、會場が大山のたゞめ收容力には選手團以外に相當の餘力があるので、見學團として各都道府縣の山岳界の有志の方々に、成るべく多數参加を願いたい。又六名の選手はA・Bの二パーティに分れ、各トリダーを含むものとする。監督は選手團の代表者でもあるが、山へかゝつてからの行動は見學團と同一である。今回は参加者側の選手と役員を切り離して考えることにする。

次に日程を述べる。

十月二十七日（第一日）は廣島市の開會式に參列後夜行の臨時列車「大山國體號」に乘車迄の間は、廣島縣の企畫に依る。

十月二十八日（第二日）

朝、伯耆溝口驛に到着、バスにて大山榑水原へ。此處から徒歩で晝頃に大山寺宿舎に到着。午後入山式、終つて代表者會議を行う。

十月二十九日（第三日）選手團のA・B班と、見學團のC班は夫々異つたコース（Aは行者谷コース、Bは正面登山コース、Cは臺圓山廻コース）で頂上登山、以後は頂上稜線の縦走、寶珠尾根を下る。

十月三十日(第四日) A班を三分して、A1班は簡単な岩場を経て頂上稜線へ出る。A2班は横手道を経て鳥ヶ山に登り槍根から頂上稜線に出て、元谷から下山。A3班は元谷からユートピアに出て野田山、大休から矢筈ヶ山に出て甲ヶ山に登り、甲川へ下り川床を経て歸る。

又B班を二分して、地獄谷廻りの大山一周コースの左廻りをB1班、右廻りをB2班が行う。

見學團のO班は一團となつて川床を経て阿彌陀川を上部に歩き、寶珠山に出て歸る。

十月三十一日（第五日）大山寺
部落に別れを示げて、バスにて米
子市に下山。閉會式後解散。（以
上の行程其の他に關しては追て事
務局から印刷物を配布する。）

登山の初日、二十九日の行程となつては頂上稜線の縦走は、ロイ土岩のヤセ尾根であつて、モロイブス等の岩尾根と違つて、物凄さはないが何となく不安な感じがする。文字通り幅は狭いが立つて歩けないことはなく、所々と云つても大半は草が付いている。

此の登山の行程には各班の先頭
にガイド、即ち道案内をつけるか
ら、選手パーティーは順序良く行
動するものとする。登山は、あく
迄も競走でない趣旨に基き、いた
づらに競走的意思を起して、前の

パーティーを追い抜いてはならない。

次に三十日の登山に關して、此の日はA・B班共に夫々都道府縣の三名宛のパーティー單位で行動し、其のリーダーは良くメンバールを、あらゆる面でリードしなければならぬ。休憩、中食等もパーティーの自由とするが、あく迄も競走的意識を起して、むやみに先を急がないこと。地圖の看讀、磁石の利用等は熟知し置くこと。

岩場は北面の最も簡単なものをコースにするが、何れのコースも殆んどガレ登りで興味薄く、取付きから稜線迄一時間から三時間程度で達せられる。ザイル等は念のため持参を願う。岩登りの後にA・B班同様に相當長距離の登山行程があるから、各選手は全員健脚家を條件として、地方接選會で選考願いたい。又バレーボールの行動となるから、良くチーム・ワークの纏まつた三名宛の二バレーの選手團を選定願いたい。選手團の各班、各コースは、本部で抽籤により決定の上通知される。

見學團じ班は、ガイドの先導で行動する。

參加者の服装は冬山の簡單なものとし、ウィンド・ヤッケを必ず携行し、又萬一の降雪に備えてピッケルは一應持参し、履物は登山靴か少なくとも丈夫な兵隊靴の要がある。(山陰支部會員・國體委員)

インスペクター

谷口 現吉

山登りは一人でよく、二、三人最も楽しく、登る山によつては、十五人位迄を必要とすることが考えられる。決して旗を立てたり胸にマークをつけて一都二府四十二縣の選手が、一山一谷に會するの要はない。況してインスペクターなど云うしろもの迄が登場するに至つては、むしろ滑稽と云いたい圖であらう。それも承知で敢て國民體育大會の登山部門を擔當する日本山岳會の意圖は、そう單純なものではないのだが、此處ではそれに觸れないと思う。いづれにしても私はその意義を認めるにやぶさかでない寧ろ日本登山界の現段階に於ては、嘉す可きこととさえ信じて居る。さればこそ行列の先頭に立つたり高いところから聲を張りあげなど、昔の山登り仲間には決して見られたくないお務めを、一再ならず果したくない次第なのである。さて本題に戻らう。インスペクター、強いて日本語に譯して見れば監察員、決して從來の登山社會にも、亦山岳用語の中にも見られなかつた言葉である。他人の山登りを態々見て廻らうなどと云うのは、山登りの世界では當に外道の仕業である。山登りは決して他人の爲にすることなく、自分さえそれで満足ならばどんな仕方(勿論他人に迷惑をかける場合は論外である)をしたつ

て一向構わない筈である。況して優秀勝敗などを念頭におくに至つては、害あつて益なきこと、此處に今更説く處もない。ところが恐る可きことは、此の外道が所を得るに横行していると云うはなしなのである。偶々の因縁でインスペクター生みの親を務めた私は、親の心を知らず、やたらに方々に顔を出したがる此の言葉が目につく都度、まことにやり切れない思ひにさせられるのである。誕生の時には立派にその理由もあつたのだし、これが正しく運用されるのなら、これが正しく運用されるのを得た一役であるに違いない。敢て此處にその由來を述べよう。

昭和二十四年には、第四回國民體育大會が、東京を中心として行われることに決定した。登山部門も、三回の経験に依つて、地方名士の顔見せ會議や、何の困難もないハイキングで楽しめようとお茶を濁すのでは濟ましく難くなつて來た。もつと眞實目な、高度登山の要素を含んだ行事を行わなくてはならぬ。そしてこれを機会に少しだけでも、登山界の次の世代の育成に資するものにして行きたい。その爲には、むしろ冬季大會に移行して行ひ可きだ、との議論も出た。結局は、場所は富士、時期は十一月初旬と決定され、初冬の吉田口に三百名の大登山が展開されたことは、各位御承知の通りである。この計畫で、インスペクターが誕生した。

この計畫が從來の國體登山と異つてゐる根本的な點は、(一)對象たる初冬の富士山は相當の危険が豫想され、ある程度の技術を要すること。(二)府縣單位で、三人一組の明確な登山隊を作り、各々そのリーダーを持つてゐることの二つである。更に参加者が遊び半分でなく、眞剣味に溢れていたことと、これに附け加えて好いことであろう。そしてこの事に於けるインスペクターの任務と、權限と、之を委嘱する人達の選抜の基準とは、次の通りであつた。任務(一)能うる限り既成編成を尊重して、何等干渉することなく登山せしめるが、危険防止には萬餘の策を講じ、その責任を執る。(二)巧みに機會を捉えて技術指導を行う(ハ)隊員(約六—一〇名)の行動を注意深く觀察し、技術部長に講評資料を筆記報告する(報告基準は豫め技術部長より指示しておいた)權限 危険その他必要と認めた時は擔當登山の一部又は全部を自分の指揮下に入れ、自らリーダーとして責を執ることが出来る。その任務は極めて重く、生ながら人は立派なインスペクターは務まらぬと考へ、その委嘱には最も苦心した。大體當時の日本登山界に於ける技術的總動員と云つても過言ではなかつた。こんな次第で誕生したインスペクターだが、實行の後自ら反省する所もあり之に言及す可きものだが與へられた紙面の都合で割愛しなくてはならないのを遺憾に思つてゐる。

來年度國體開催豫定地を視るの記

——島海山——

林 和 夫

満々と五月雨を集めて早い最上川に沿つて酒田へ向う汽車の上で朝を迎えたのは、五月三日であつた。兩岸の所々に萌え出た白樺の新緑が目も覺めるばかりに美しい。酒田市で小憩。東京から行つた成瀬、藤井、林に山形から加わつた後藤支部長以下數名、更に酒田から數名を加へ總勢約廿名でバスを仕立て、湯ノ壺温泉に向つた。夕刻湯ノ壺温泉、こゝに帝石の石油採掘場がある。一時は素晴らしい量を出したが今日では殆んど出なくなつた相で今更の様に吾が國の天然資源の貧弱を思い知らされる。こゝに最盛期に建てた大きな合宿所があり今日では殆んど使つていない。國體のときには拜借出來相で心強い。(約一五〇名收容出來、湯の壺温泉として二〇〇名位は泊れる)翌四日早朝發、途中から夏道を離れて東側の臺地を進み八〇〇米附近でスキーをつけた。河原宿から流れ下る澤が一旦急流となり(白糸瀧)再び緩かになるあたり、小舎の建設豫定地を見つけた。環境はよいが風がかなりあたる。濕つたアザラシ皮のついた重いスキーを引きつづいて仙ヶ洞(八九〇〇米)につく頃はすつかりへばつた。こゝでシーデボーリーアイゼンをつけて歩き出したとたんに先

ダック・バンガローと山村

ナンダ・コート初登頂(續)

堀田 彌 一

辿り着いたブルキヤのダック・バンガローは餘り大きくないが、よく整つた氣分のよいものであつた。マントルピースの上にはサイン・ブックが置いてあつた。それをめくりながら、アルプスの山小舎を想像した。爐の中では薪はよく燃えた。ビンダリー氷河觀光の旅行者のために建てられたこのバンガローは、我々にとつては充分満足すべきものであつた。

汗だらけの下着やシャツも取替えたり、乾かしたりした。アンツェリンの食事を運んで来るのが非常に待遠しかつた。可成り時間はかゝつたが、良く炊けた美味しい飯だつた。ハヤシライスにしてあつたが、渡航以來初めての健啖振りを發揮した。焚火を囲み、煙草をふかし、しばし完成と安心と満足の虚脱状態が続いた後、昨夜來の疲勞で深い眠りに入つて行つた。

實に久し振りに、我々は心地よいベッドの上で目が覺めた。珍らしくも、下着だけで寝ていた羽根のシュラフ・ザックの中は良く温つていた。カトコダムに着いたその晩以來約二ヶ月間、我々はこのシュラフ・ザックを一夜もはなしたことはないが、これ程快適なことはなかつた。暑さの爲、寝つきの悪かつた。ダック・バンガローもあつた。ヒマラヤ山の麓の何個所かのキャンプでは、大體羽根のシュラフ・ザックは、使いやすいものであつたが、雨や雪の日の濕氣、キャンプ地の地盤の悪さ、テント内の廣さの制限、身につけている餘分な衣類のために、いつも十分な快適さは得られなかつた。高處キャンプに至つては防水布と眞綿のシュラフ・ザックをも重ね、更に嚴重な裝備のまゝ寝た。高度が加わつて、空氣の稀薄な處ではシュラフ・ザックにもぐり込むだけで非常に苦しい。まして、寒氣の激しい氷雪上のテントで寝ることは、それ自體一つの訓練と闘いによらねばならぬ。

雨季も、とつては明けて十月も中旬へ入つたとは言え、印度の各地では未だ灼熱が去つてはいない。併しここは海拔一〇、〇〇〇呎に餘る高さがある。この高さが季節風後退と相俟つて、最も良い一つの氣候を作つて呉れた。

熟睡したので眠り足りないことはないのだが、シュラフ・ザックの温もりに未練がある。がさ／＼させ、目が醒めているものもあるらしいが、まだ起上るものはない。やはり快適な寢袋を楽しんでいるのだらうか。塵埃と水分の含んでいない美しい朝陽が窓から差し込んで来る。仲間の一人が口ずさむ唄は私の心をとらえた。明るく、美しく、楽しく。彼は音楽的素養があるとは聞いていたが、これ迄それを知る機會はなかつた。いつの間にか合唱が始まり、一人二人とシュラフ・ザックから抜け出した。ずつと愛煙して來たゴールド・フレッキーの罐に手を伸したかつたからである。

なんと云う素晴らしい朝だらうか。幾らかひや／＼する空氣の、爽やかな觸覚が何とも云えぬ心地よい氣分である。窓の外では美しい陽光が朝の影を寫して、山や谷に描く線は、この自然のいやが上にも秀麗なものとした。「サラーム・サーブ」と元氣で明るいアンツェリンの聲が戸口にはづんだ頃、皆起きて朝の支度に取にかゝつていた。

明るい陽光に誘われて外に出ると、ビンダリー上流の廣く開けた谷も廻りと突き出た急斜面のため、その源の氷河とそれを圍む主峰の全景は得られない迄も、輝くモルゲン・ローゼンを映した氷雪の一角を美しく望み見ることが出來た。焦熱の印度の平地から嚴冬にも勝るナンダ・コートの頂を経て、快適なこの氣候に遭遇する迄四季にも當るものを、我々は二月足らずの間に壓縮して過した。しかも僅か一日前の朝、トレイル・パスを越した氷雪上で星を戴き、眠りもしないで待遠しい朝を迎えた。かくも急激に移り變る氣温は凡てを度外して、我々の心に春の直感を訴えずにはおかなかつた。

ビンダリー氷河の末端を最後に、八〇哩のマイルストーンを逆に拾つて、滿された喜びと愛着の情をおさえながら、我々はアルモラへの途を下るのであつた。そしてベース・キャンプで別れた通譯の廣瀬、サダーのヌルサン、エスコートのマテルダスによ

再會の稀觀書

——蘭と石楠花に關する文献——

小林 義 正

十九世紀の後半には自然科學部門で實に秀れた文献が數多く出版されている。

私は先頃、ゼンベル著「ヒリッピン多島海の編歴」と題する尤大な書物に接する機會に恵まれ、恐らく現代にも期待し得ないような立派な研究に暫らく感嘆を惜まなかつた。同書は一八六六年から一九一六年の間に獨乙から、出版され、本文十卷附録二卷、ヒリッピン近海の生物相を網羅して剩すところがない。そして、このことか

著者 Sir George Kings はカルカッタのローヤル・ボタニックガーデンの所長、また共著者 Robert Pantling はシッキムの規那農園副所長で一九九八年にカルカッタから出版されている。パントリングは一九八二年以後引續き前記農園にあつて、多年蘭を描くことに餘暇をさし、挿畫は全部同氏の筆になる。ヒマラヤの山間、峽谷で採集された標本は脚の速い苦力を使つて敏速にパントリングの許へ届けられ、それがまだ生き生きしている中に描かれと述べられている。キングは雄蕊の形態に就て、シッキムに於ける瞬時の調査によるものであるがと斷つて、他の多くの學者と異なる見解を述べたが、此問題はその後どうなつたか、また同書の學術的地位といつたことに關しては、遺憾ながらズ

の素人の私には全く判らない。蘭が趣味家の間に、昔から少くも珍重されている事實は、その氣品の上からも肯かされるが、我國でも「きばなのしよきらん」と呼ばれる蘭が、山中稀れにしか達着するに過ぎないといふことが、牧野、植物圖鑑の開卷第一の圖版にも述べられている。ともあれ机

その中の一冊は、キング、パントリング共著、原名 Sir George King and Pantling, "The Orchids of Sikkim-Himalaya, Calc-

つて指揮されたアルモラ・クリー達の輸送隊を、カ
ブコトで迎える爲に途のりを急いでいた。

石楠の間をぬけ、芝生を横ぎり、疎林の中を通つ
た氣持よい途が、時々放牧の牛で邪魔されてた。
ブルキヤのダック・バンガローを出た時、河身は見
えなかつたが敷下ると、美しいビンダリーの流れ
がヒマラヤ山中では珍らしい清爽な飛沫をたてて
いた。ビンダリー河の左岸から右岸へ、更に左岸へ、
或は低く渡り、或は高く巻いて、美しい流れと共に
下ること數哩の後、河身をはなれ、間もなくカテイ
のダック・バンガローについた。

未だ時間は早かつたが太陽の斜線はバンガローの
石疊に美しい蔭を宿し、緑の木々の間にも、黄色く
寫る草木に秋を偲ぶことが出来た。併し美しい光線
と明るい光は我々の曾て経験した秋とは全く違つた
印象を與えた。

ビンダリーの谿谷が開け、出尾根の盛り上る麓を
開墾した沃土はカテイの部落を養つて居る。沃土と
は云ふものの、猫の額の様な僅かな平地と丘陵の裾
の小さな段々畑であつた。この部落には十軒餘りの
至極に簡素な民家があり、少し離れて、氣持よいダ
ック・バンガローがあつた。水河の末端から十數哩
ビンダリー谿谷の最奥の部落としては温和な風土に
恵まれていた。七二〇呎の標高はあるが南に流れ
るこの流域は終日よく陽が當る。兩側の開いた高い
山は風雨を遮り、嵐を防いでくれるであらうが、
太陽の恵みを邪魔することなく、湧き出る泉を渴
らすこともあるまい。

大味のするヒマラヤの山村の中でも、こんなにす
つきりした素朴な山村があつた。我々の氣分によく
合つたこの山村の印象が、今もなお私の頭から消え
去らない。

我々は又ここで初めて新鮮な食糧を得た。ここの
ある牛乳の味は得がたいものであつたし、蜂蜜をつ
けたローティはホテルの焼たてのパンにも劣らなかつ
た。マルトリで手に入れた馬鈴薯はベイス・キャ
ンプでも有難いものだつたが、ここのは格別美味し
かつた。

バンガローの番人は薪を豊富に持つて來て呉れ
た。居心地のよいバンガローの一夜は、旅の思出を
楽しくするばかりだつた。

我々はこの山村の最もよい季節に遭遇しているの
ではなからうか。モンスーンも完全に去つて、乾燥
した空氣と一點の雲もない快晴は、太陽の光を非常
に美しいものとした。しかも七千餘呎の標高は氣温
をよく調節し、十月中旬の季節は直射を和らげ、穏
和な日と夜を和らげていた。

ことに朝の氣分はよかつた。カテイの村はづれで
振りかえると、バンカッティアの續きらしい雪峰の
一角が見えた。ブルキヤから十一哩、二三回望まれ
た雪峰も愈々これが最後となるであらう。心なしか
一段と冴えて見えた雪峰に、我々は別れを惜んだ。
次の泊りはロハルケットの道程も昨日と同様十
一哩だが、ビンダリー谿谷からはづれ、峠を越さね
ばならぬのと標高が下つていゝので、登りと暮さの
苦勞がある。併し人里に出た我々はカテイで數人の
人夫を僱い、荷物を全部運ばせたので全くの空身と
なることが出来た。

高原状にひらいた尾根の登りでは、よく陽が照つ
たがお蔭で大した苦勞もなかつた。峠の頂上はカテ
イとロハルケットの丁度真中であり、ビンダリー河
とグルジュウ河の分水嶺をなし、奇麗な草付と森林
に蔽れてた。

ロハルケットも近くなつた頃から羊の群をあちら
こちらに見受け、羊飼の笛の音と羊の首に下げた鈴
の音が奇妙に印象的であつた。ロハルケットの附近
は盆地のような感じがする。廣く開いた地形をして
いた。カテイと比べて標高も低く邊りは一帯に開墾
されてた。人家もあちらこちらに點在していて村
里の氣分がたゞよつてた。道の縁には石を積んで
石垣を造つたり、バンガローの庭の境や田畑を石で
圍んだ風景は、前ヒマラヤの村里にはよく見られる
が、ここでもやはりそうだつた。バンガローの入口
で、道端の石垣によりそうた子供が數人珍らしそう
に我々を見つめていた。



(アメリカ山岳會章)

上に東部ヒマラヤ固有の關の生態
を眼前にまぎ／＼と偲び、身ヒマ
ラヤ峽谷にあるの想ひにひき入れ
られた春宵のひときは楽しかつた
。献辭は碩學 Sir Joseph Hooker
に宛てられてゐるが、私の手
にした一書には共著者バントリン
グが彼の母に「情愛深き息子より
母に献ぐ」という署名を見出し
た。その署名のインキも大分色あ
せて。
私の眼を喜ばせた今一つの本
は、石楠花に關する J.G. Millar
is の著書であつた。原名は
J.G. Millar-Rhododendrons
in which is set forth an ac-
count of all species of the
genus rhododendron (including
hybrids, 1917
ミレイズには此他にも數冊の著書
があるが、前記の書は石楠花の外
麗な色々の雜種にも及ぶ廣般な
文獻として貴重である。第一卷は
一九一七年に、第二卷は一九二四
年に出版され Miss Beatrice Pe-
ters 等の筆による十七葉の美事
な色彩圖版と、十四枚のコロタイ
プや多くの寫眞版を入れ、加える
に詳細なアルファベチカルインデ
クスが附されてある。麗麗の灌
木に興味を寄せる者にとり垂涎の
書たるを失わないと思ふ。
時あたかも五月、本邦の山中其
處彼處には、今石楠花が清楚な花
をつけて、登山者の眼を喜ばせて
いることであらう。
同書は五百五十部の限定版であ
り、ロンドンのロングマン社から
出版され、當時の價格各十磅十志
時價何れも一萬圓以上のものでは
ある。

Château Brillant

山頂で 山小舎で
アルペンの氣分が満喫出来る

純フランス式高級ブドウ酒

サドヤ醸造場 甲府市御納戸町

(現品は山岳會館にあり)

ろ。
こゝで想起するのは、冒頭に述
べたフーカールの著書である。同氏
には Icones Plantarum 30 vols.
を始め、幾多の植物學上貴重な文
獻があるが、シッキムヒマラヤの
石楠花に就て記述した Sir Jos-
eph Dalton Hooker, Rhododen-
drons of the Sikkim-Himalaya.
は、一八四九年の出版にかゝり、
開巻殆ど机上を覆う大冊、圖版も
精緻を極めていた。戦前丸善の書
庫で始めて此書に接し、息づまる
思いで頁を繰つた感激は今も記憶
に新しい。恐らく何處かの圖書館
か、篤學者の書架にそのところを
得たものと思うが、其後の消息を
聞かない。いま同書を追想してそ
の健在を冀うの念切なるものがあ
る。(二六、五、五)

木暮翁紀念像建立



我國登山界の大先輩木暮理太郎氏が日本山岳會會長在任中病歿されたのは昭和十九年五月七日で、早くも七年の歳月が流れた。

昨年春、故人の七周忌に當つて本會では、追慕の小集會や晚餐會を催して、在りし日の木暮翁を偲んだことであつたが、その頃から霧の旅會と石楠花山岳會、この二つの、故人と深いつながりのあつた會の有志が中心となつて、紀念像の建立が企畫された。

レリーフはウェストン像、小島鳥水像を手がけた本會々員佐藤久一朗氏の刻むところ、四月末本會クラブで披露式が行はれ吾々は温容慈父のやうな木暮翁の面影を永く傳へ得ることになつたのを喜んだのである。

建設の地は翁が最も心を惹かれまた先驅者として大きな足跡を残

した——秩父山塊の、雄峰金峰山の西麓金山（カナヤマ）ときまつたので、五月六日を卜して除幕式を行ふことになつた。

金山の唯一軒の居住者有井氏の先代が故人最初の金峰登山の折に案内を勤めたといふのも奇しき縁といふべきであらう。

五月五日夜有井氏宅には、式のために來た人に偶然來合はせた人を加へて五十餘人の登山者が宿泊し足の踏み場もないほどであつた。

當日は、うるはしの五月よ！とでもうたひたくなるやうな五月晴であつた。宿から十分ほど登つた東南向の斜面、まばらな林の中に見出された巨岩に紀念の浮彫は取付けられ、淡紅のヤシホツツジと山櫻が色を添えた。

午前十時、幕が除かれて、斜めに陽をうけた翁の温顔が、参列者のみんなに微笑みかけてゐるやう

に仰がれた。簡単な報告、挨拶、祝辭、追憶談があつて、一同はまたいつの日か、この像の前に立つ機會のあることを心に期して、式を閉ぢたのであつた。

秩父の山村の中でも、ことに淋しい金山の地に紀念の像が建立されたのは、目立つことの嫌ひだつた木暮翁にふさはしいと思ふ。しかし金峰、ミヅガキ、木賊峠、信州峠と秩父の山旅を好む者には、見逃されぬ對象の中心にあることだから、今後も心ある登山者はこの地を訪れて、山の大先輩を偲ぶであらう。またさうあることを望んでやまない。

(T・F)

ウェストン祭

ウェストン祭というものが一體どんな事をするものか、よく知らないままに、上高地へ行つた。地元の人たちに聞いてみても、お祝いのなか、お葬式的なものか、さつぱり良く判らない。ウェストン像に花環などを捧げるところをみると、丁度無名職士の墓にお参りしてゐるやうな錯覺を起すが、地元の人々の挨拶や地方事務所長といつたお役人の話など聞いてみると、鎌倉あたりで夏よくやるカーニバルみたいなもののような氣もする。

僕は、こんなわけのわからない催しものは、ウェストン翁が日本アルプスに入つてから丁度一〇〇年とか、なくなつてから三〇〇年とか、意味のある年だけ全国的にやつたら良いと思う。ウェストン祭には毎年参加しているという御定

連もあるようだが、普通の年には日本アルプス山開きの行事の一つとして地元だけでやれば充分だという氣がする。もちろん、毎年行かねば氣がすまぬという御方が、自發的に御参加になるのを妨げるものではないし、地元が適當な人を他の地方から招待することをいけなというわけではない。

一體、上高地にバスが直通して便利になつたからといつて、山の旅館を熱海や湯河原の温泉宿のやうにしなければならぬという理由もないし、ペンキ塗りの小屋などを建てなければアメリカ式のペンキ文化におくれるとも思つてゐるのだろうか、ペンキ文化の本家の周囲の風景にふさわしい建築や造作をすることはあつても、ペンキのやうな野暮なものだけはございませぬ。

ウェストンさんの像の下に、今度會員佐藤久一郎氏の御盡力で、ウェストン翁自筆の署名と生存年を記した銅版がとりつけられた。その他、ウェストン氏とは何者なりやを示す英文の立派な銅版がはめ込まれた。しかし、肝心の名前の綴りが誤つてゐるのは「王にきず」である。

上高地も、上の方をみてみると昔ながらに美しい。これから久しぶりに上高地に行かれる方々は、ウェストンさんが、下界になつた上高地に苦笑されてゐるところを御覧になり、成るべく山や空を見て歩いて頂きたい。(K・N)

★
★
★

楽しく寫せる

さくらファイル

コニカカメラ・パールカメラ

小西六寫真工業株式会社

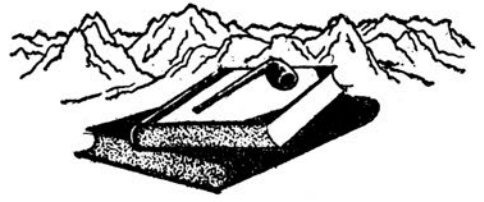


図 書 紹 介

Himalayan Journal

Vol. XIII—1946;
Vol. XIV—1947

昨年の秋印度へ行かれた松方さんが、戦後刊行された山の洋書を幾冊か將來された中に、ヒマラヤン・ジャーナルのバックナンバーが見出されたので紹介しておく。第十三巻（一九四六年）は戦後初めて刊行されたもので、一五〇頁。編集者はC・W・F・ノイス、創刊以来の編者メイスン教授を失ったことは非常な打撃であるらしく、ヒマラヤに關心を有つ程の人は、何人も彼に對し無限の感謝を拂ねばなるまい。先ず第一に彼を、今日迄ヒマラヤン・ジャーナルを極めて美しい姿で刊行しあらゆる山の定期刊行物中最も素晴らしいものに仕立て上げた。然るにたい美しい許りでなく、同時に

その内容も完璧の出来だった。メイスンはヒマラヤの諸々な細かい事情を説明し且その一つ一つを結びつけるのに無数の知識と技術をもつていたからである。造詣深い一つの頭脳が、これらの事情を堀り起し結びつける、編集とは、そういう人目につかない仕事なのだ。この意味でメイスンは完璧な編集者だった。そして彼の損失は掛け合いがない。と冒頭に彼の勇退を惜む言葉が見られる。

主な内容は一九三九年のカラコラム(P・モット)、T・H・ソマーグエルのシツキムとナンガ・バルバット附近の小遠征、一九三九年ドイツの隊のテント・ピーク(Eグロブ)・チョミオモとパウフンリ(T・H・テイリイ及びC・W・F・ノイス)・フンザのアフディガル・パス(R・シヨムバード)等で、エクスベディション欄にも興味深いものが多い。特に見逃がせないのは追悼欄で、此處には、C・G・ブルース、ノーマン・コリー、サー・F・E・ヤングハズバンド、サー・A・スタイン等の巨人の追憶が、エヴェレストで活躍したオリバーやスペンダーのそれと共に記載され、まさにイン・メモリアムの豪華版の感じである。挿入の寫眞は相變らず素晴らしいものばかりである。

第十四巻（一九四七年）は編集者がH・W・トビンに代つてゐる。主な内容は一九四六年のサセル・カンリイ(J・O・M・ロバーツ)一九四六年のネン・クン山群(R・ジェームス)、バダール地方紀行(F・コルプ)一九四五年のナン

ダ・グンティ(P・L・ウッド)一九三九年ドイツ隊のナンガ・バルバット偵察(L・チケン)ガルワールのスキー(R・V・ヴァーネエド)ニルカンタ(C・G・ワイリー)等。本號中特に興味深いのは補遺として挿入されている。一九三九年のナンガ・バルバット遠征隊に属していたP・アフシユナイターが、約二ヶ年を費してチベットへ潜入した紀行と同じく彼が記したナンガ・バルバットの偵察記とである。編註によると、この二つはラツサで執筆され地圖とパノラマを添付して一九四七年十月空輸されたが、途中で失われた。それでアフシユナイターは再び稿を新たにし、地圖とスケッチを附けて發送し、それがH・Jの編者の手に入つたのは一九四八年一月であつたと云う。パノラマの中にはエヴェレストを北に隔る六十哩のメンカブ・メユから畫かれた素晴らしいスケッチがあるそうだ。之等は本號の締切を遙かにおくれたため、文章のみ補遺の形でH・Jののせ、あとの資料はメイスン教授の手で整理されて何れアルバイン・ジャーナルに載せるであつた。

本號は一二〇頁、寫眞は前巻同様美事である。(T・M)

Mazama

この會誌については前號に述べた通りエーレス氏が一九〇〇年以降の貴重なバックナンバーを會に寄贈されたが、一九四九年號と一九五〇年號とが近着したので、その概要を記してみたい。

★ Vol. XXXI, No. 13, Dec., 1949.

大體がオレゴン州近邊の山登りの紀行が主であるのは、マザマ・クラブの立地條件によるが、本號にはアメリカ合衆國からは最初のアイリッシュ・登山記とアラスカ南部の氷河の記述が注意を惹く。またエーレス氏はグラント・テントン東稜の第二登攀をものしている。

★ Vol. XXXII, No. 13, Dec., 1950.

エーレス氏の筆になる「ワシントン・キヤスケードの二週間」等大體オレゴン近邊の紀行が主である。内容を一々紹介する要もないが、會の組織とか事業とか云つた面できぐれば参考になる點も少くない。

マザマ・クラブはオレゴン州ポートランド市に在り、一八九四年創立と云う古い歴史をもつ會で、マザマとは西部アメリカの山脈に棲息する羚羊の一種の名だそうである。會誌の巻頭には「人間の足以外の手段では登ることの出来ない且少ない一つは生きた氷河のあるような高山に登つたことのある善良な人なら誰でも會員になることが出来る」と入會資格を掲げてあるのは面白い。約四六倍版、總アト紙約九〇頁で、寫眞が豊富に挿入されている。(T・M)

Tyndale House

Fritz Bechtold's "Deutsche am Nanga Parbat" は寫眞のきれいな書物として永く印象に残るものだが、その英譯者としてわれ

われの間にも親しい H. E. G. Tyndale 氏は一九四八年に長逝した。彼の登山は一九〇四年、彼がまだウィンチエスターの學生の頃から始められた。その手ほどきをしたのはこれも有名な R. L. G. Irving 先生だった。彼がアルバイン・クラブへ入會を許されたのは一九〇九年で、その後間もなく牛津大學山岳會の初代會長に推薦された。

一九一一年のシーズンにはアイヴィン・グレン先生やエヴェレストで亡くなつたジョージ・マロリーと一緒にグレイアン・アルプスを訪れたいでモン・モウディからモン・ブランの登攀を行つてゐる。彼はまた屢々西部アルプスを訪れ、アローラ、ザリス・フエなどは特に好んだ所だった。或は又東方エンガディーンや彼が道慕して已まなかつたユリウス・クギイの名にひかれてユリア・アルプスを訪れたと云う。彼は牛津大學で學位をとつてからは、ずつとウィンチエスターの教師をし、廿五年の長い間その教頭をつとめた。彼が編集したり、或は翻譯したりした山の本で、著名なものは少なくない。一九三八年以降永眠する一九四八年迄の十年間は、アルバイン・ジャーナルの名譽ある編集者でもあつた。

彼の死後、遺稿はアーノルド・ランによつて編集され、新山岳叢書の一巻として一九四八年倫敦の Eyre & Spottiswoode から出版された。題名は "Mountain Paths" と冠され、本文二百餘頁挿畫十五葉、價格十二先令六片とある。(T・M)



會員通信

巴里便り

吉阪隆正

(前略) スイスへ行った時は私の財布のゆるす限りで味つて来まして、それから何と云つても短期間の滞在故、重點主義をとらねばならず中々實現出来ないうです。そして先立つものがないし、道具は戦災以来そろつていないし、全く不利な状態です。アルプスの民家の調べ位で、うしろの景色を眺めて氣をやすめているのが今の所の状態ですが、これからのシーズンにじつとしているのはたえられないことだらうと思います。

所でヒマラヤの件、昨日の新聞に又新しくリオンの人々がガルツールにでかけたとありました。四月廿四日に出発して三ヶ月の豫定だそうです。隊長は Roger Duplat 隊員には Louis Gevill, Gilbert Vigne, Alain Barbezot, Louis Dubost 他に、映畫の技師 Languepin 醫者 Dr. Payan が同行する由、セイロンまで船で行きそれから飛行機にてできるだけ山の近くまで行く由、目標ははつ

きりしないのです、七〇〇〇米級を二つ位やつた上で、もう一度ナンダ・デヴィに行くのだと懇張つたことが書いてあります。

アンナブルナの方はまだ寫眞集が出ただけで、登攀のまとまつた本は出ていません。近く出るのだとは云つていましたか……ダッラギリイの南面の大きな寫眞と、北面のもう少し小さい寫眞がのつています。エグレスの性格を見せていて中々魅力があります。東側が見えませんが谷をつめることとさえできれば、案外有様に思われますが如何ですか？

ル・コルビチエ氏最近印度パンジャブ首都の計畫で夢中ですが一寸も山の話をしないのは惜しいことです。この話のあつた一月頃随分シムラへ一緒に行ったかつたけれど、とうとう駄目でした。實に残念です。

講和條約の話が大分進んでいる様ですが、その後どうなりましたか。遠征計畫はどういう風ですか、印度の學生は大分居るし、日本には好感を持つているので、友達になつていますが、山のぼりに一寸も興味がないので中々話にならない。セイロンに居る女流建築家だけはいつでも来てくれと招待してくれましたが、遠い所の約束ですからまあ暖めて置く位です。

登山は別としてキャンピングは中々はやつています。今その道具の展示會が行われているので、暇を見つけて見て来ようと思つてい

ます。羽毛のシラフなどは随分町のアンちゃんでも垂涎ものらしいですが、先ず五〇〇〇法以上はします。一人用テント、底なしがやはり五〇〇〇法と一寸位です。兎に角旅行はタダでできるので、すから、泊りを節約してということ、はやるわけです。旅行がタダというのは auto-stop といつて街道筋で誰の自動車でもよいから止めて、乗せて貰う手で、乗りついで目的の地へ行くのですから實に樂です。去年の夏はカデヤックとビークの新型だけ選んで、五〇〇〇軒ばかり旅行したと云う猛者もいます。女の子でも一人でこういう旅をするそうですから、うまく行きあたれば大變楽しい旅行を、タダでできるのだそうです。今年はドイツからスカンディナヴィアへ行くのだとか、北アフリカを廻つて来るのだとか、大きな計畫をたて、いる連中は皆この auto-stop 目當です。東洋から來ている連中曰く東洋にもこういう旅行の方法があるといふのだけれども、自動車があるに走つていないのが難點だと嘆いていました。

アメリカではこういう旅行方法が行われているかどうか、未だ聞いていませんが、日本ならさしづめトラック位ならできないこともないかも知れません。學生諸君には大いにお薦めしたい方法です。旅行から山へのみちはいかなり近日本からの遠征隊派遣の地盤もきずかれるのではないでしようか。遠征隊の道具にしても、その産業の普及度が大いに問題になると思

CAF (フランス山岳會) との連絡の件、今の忙しい仕事で一段落ついたら何とか訪ねて見ようと思います。何れまたその内にお便りします。山岳會の皆々様によるしく。(一九五一・四・一八翌月達夫氏宛)

「高山深谷」掲載作品の發表

「高山深谷」第十一輯の寫眞を一般から募る旨の發表をしたのは昨年の九月であつたが、其後應募作品中に採用すべきものが意外に少く、ためにメ切を延期したり更に贊助出品を求めるとの方法を講じたりしたため、刊行が豫想外に遅延した事情は中間報告で既に御承知と思うが、今般漸く左の通り掲載作品の決定をみるに至つたので茲に發表する次第である。永らくお待ちしたことをお詫びすると共に應募並に贊助出品者各位に對して衷心感謝の意を表したい。寫眞は既に製版にとりかゝつたので秋には新裝なつて各位の御手許にお届け出来ると思う。

今回の選考の方つては次の方針に従つた。即ち、寫眞としての優秀さよりも、むしろ山登りに打込んだ登山者にしてはじめて能く撮り得るような作品で、然も優秀なものと云うことを目標とした。寫眞の會でなく、山登りを中心とする本會が編集するからには、このことはむしろ當然であらう。それ故寫眞としては相當すぐれたものであつても、選に漏れたものがあつたことを諒承して頂きたい。

次に本會が當初發表した懸賞金の件であるが、掲載作品中から特に數點を選んで一二三等を決定することが殆ど不可能であつたがため、懸賞金總額二萬九千圓を各位に均分することとした。これも併せて御諒承頂きたい點である。右は發刊と同時に掲載誌と共に御送りする豫定である。今回の選考・編集委員は役員會の決定に基き、船越好文、外山義夫、望月達夫、林和夫、角田明の五名が委嘱された。

採用作品

- 一 冬の奥穂高岳 角田 明
- 二 滑若岳分岐點 橋本 誠二
- 三 コイカクシエ札内岳よりの北望 山崎 英雄
- 四 札内川源頭よりのボロシリ 橋本 誠二
- 五 ニベツツ山 山崎 英雄
- 六 八甲田大岳 塚本 閑治
- 七 鳥海山の岩氷 猪谷六合雄
- 八 利尻岳にて 川上 晃良
- 九 嚴冬の利尻岳 同 右
- 二 銀岳・立山連峰 立教山岳部
- 三 銀岳三の密附近 法政山岳部
- 三 藥師尾根よりのスゴの頭 福原喜代男
- 三 八ツ峰第七峰 飯山 達雄
- 四 白山より北アルプス連峰 山本 紀一
- 五 銀岳にて 法政山岳部
- 六 北方よりの銀岳連峰 同 右
- 七 奥大日岳 馬場 勝彦
- 八 冬の立山地獄谷小舎と大日岳 佐伯 謙豪
- 元 不歸岳第三岩峰 關西學院大學山岳會
- 三 鹿島槍ヶ岳 福村 俊一

三	前穂北尾根の冬登	明大山岳部	石場 清三
三	常念岳	同 右	小田 一男
三	北穂高岳	藤村 隆輔	慶應山岳部
三	天狗平山の朝	中野 峻陽	塚本 閑治
三	冬富士	安保 久武	太田 四郎
三	徳本峠からの穂高	内藤 八郎	風見 武秀
三	冬の八ヶ岳	石川 治郎	中野 峻陽
三	爺岳(鹿島槍東尾根より)	田中 邦彦	寺田 正
三	白馬岳(池田附近)	健一	坂下 明
三	冬の北鎌根にて	東京登歩溪流會	月原 俊二
三	奥穂とジャンダルム	明大山岳部	阿蘇高岳北尾根橋本
三	佐渡金山	近藤 福雄	三 八
三	屋久島・宮浦岳	加藤 數功	鹿島槍アヲ澤奥壁
三	聖岳	慶應山岳部	故 小谷部全助
三	凍る雲龍溪谷	風見 武秀	山小屋
三	三站の北面(伯耆大山)	橋本 三八	晩秋の尾根路
三	越中毛勝山	織内 信彦	阿蘇根子岳
三	穂高潤澤	太田 四郎	瀧谷第三尾根
三	ジャンダルム	中澤 義直	瀧谷の全貌
三	西鎌よりの槍ヶ岳	福原喜代男	ガスの中を行く縦走隊
三	八ヶ岳東麓	藤島 敏男	新雪の瀧谷第二尾根
三	甲斐駒ヶ岳	小倉 志郎	新雪の穂高
三	五月の芝倉澤にて	朝比奈菊雄	冬の各川岳頂上
三	一の倉澤の雪崩依田	孝	吉川 幸
三	草履塚と飯豊本峰	藤島 玄	富士山
三	樹模樓(鬼面殘雪)	野島 滋	影富士
三	仙人峠よりの鍾岳	内田 耕作	吹雪く山嶺
三	ハツ峰にて	故 原 鐵三郎	冬富士にて
三	白峯北岳	船越 好文	猶魔ヶ岳にて
三	一の倉本谷スラブ		雲表の槍ヶ岳
三			八甲田大岳西斜面にて
三			蔵王龍山
三			二 新高山
三			三 新高山
三			同 鈴木 正俊
三			右

倉報に原稿を御送り下さい
十五字詰用紙を使用のこと

蔵王の登山技術講習會

山形縣教育委員會及山形縣山岳連盟が主催し本會及本會山形支部が後援した蔵王山に於ける積雪期登山技術講習會は、二月十日から十三日の間に行はれた。會からは林和夫、加藤喜一郎、千谷壯之助三氏を講師として派遣、現地では會長多田幹次氏(山形支部長)はじめ支部の諸氏が中心となつた。講習會はスキー、氷雪技術の他雪洞イグラー等の實習を行い、夜は講演、座談會等に過し成功裏に無事會を閉じた。参加者三十三名。

冬の利尻富士について

前號記載利尻富士積雪期初登頂につき、相川修氏から左の注意があつた。右初登頂は昭和四年三月二十三日北大山岳部員井田清、櫻井(舊姓南部)信雄兩氏により遂げられた筈で、ルートは鬼脇側よりで今回川上見良氏の登つたルートは、結局前者と同一ルートではなかつたかと推察される。(尚、北大山岳部々報第二號「井田清「三月の利尻岳」参考」)

會務報告

★役員事務分擔★

總務部——堀田
庶務部——望月・林
會計部——村山
事業部——藤井
第六回國體祭——灘波・村木
一般——辰沼・鈴木

出版部——織内
山岳部——石原(巖)・望月

會報係——織内
山日記係——林

高山深谷係——望月
圖書部——小野

渉外部——今井田・田口・高木

會報前號發表の理事中左記八氏を常務理事に選出した。

堀田・谷口・藤井・望月・林・織内・灘波・村山

ウェストン祭開催さる

ウェストン祭は、さる六月二十四日、上高地梓川畔の碑前で開催され、朝來の快晴に各地から參集した會員約五〇名、きわめて盛會であつた。信濃支部の地元にある協力斡旋の勞は、例年のことながら感謝に堪えないところ。また長野縣の配慮により、ウェストン氏についての解説が直録版に英文で刻まれ、現地にとりつけられた。なお、ウェストン祭のやり方について、參加會員から別項のようない文が寄せられていたが、會としても今後の方針として善處方を検討したいと考えてゐる。

松方理事長渡歐

理事長松方三郎氏は、ロイター通信百年紀念祭に出席のため七月四日空路羽田より渡歐された。ロンドンで滯英中の島田巽氏(本會評議員)と英國山岳會を訪問することなどが豫定されており、瑞佛、米國等廻遊して九月早々歸國の筈。

チリ山岳會と連絡

名譽會員高野慶藏氏の令息岳雄氏が南米旅行の途次チリとボリバイヤの山岳會へ連絡され、その會誌、バッヂ、ベナント等を本會へ將來された。會は氏の好意に對し深謝すると共に、早速兩山岳會へ連絡をとり將來會誌の交換等を約した。

編集後記

今月號から會報の編集は私がやることになつた。會報は「山岳」ほど古い歴史はないが、「山岳」同様傳統ある刊行物で、會の風格なり、傳統、會員の動靜、海外事情などが絶えずつたえられ、受継がれていくのである。編集者の責任はすくなく重いわけであるが、不幸にして私は餘り深い経験をもちない。創刊以來秀でたエディターが續出して、會報の面目はいかなく發揮され、會員にとつては會報の來るのが心待ちなほど樂みであつた。現に私自身もその一人であつたが、はたして私に、今までのような會員を樂ませられるようなものをつくれるかどうか不安なしとしない。會員各位の協力と叱正をまつ次第である。(織内信彦)

昭和廿五年七月三日 發行

東京都千代田區 神田駿河臺四ノ六

發行所 法人 日本山岳會

編集者 織内 信彦

電話(二〇八九番) 日本體育協會

神田(三一二四番) 三二四番

印刷所 株式會社 技報堂



第六回

國民体育大會

登山

大山國立公園

1951. 10. 27—31.

準備事務を開始致しました。「國體登山豫報」を発行します、希望の方は御申込み下さい。

鳥取縣米子市中町三〇・米子市役所内 電話米子1番

第6回國民體育大會鳥取縣準備委員會 事務局

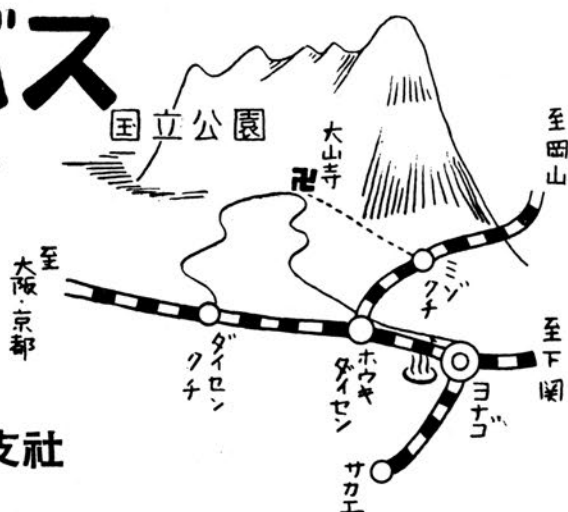
略 稱 第六回國體登山事務局

大山登山バス

米子 — 伯耆大山驛 — 赤松 — 大山寺
 大山口驛 — 佐摩 — 大山寺
 溝口驛 — 金屋谷 — 大山寺

米子市東町 36 電話 89・644

日ノ丸自動車株式會社米子支社



大山寺

宿舎案内

イロハ順

原田旅館	兜山旅館	土佐屋旅館	洞明院	理觀院	觀證院	大山ホテル	蓮淨院	上杉旅館	國鐵山の家	不老園	佐伯旅館	宮本旅館	下杉旅館	管田旅館
------	------	-------	-----	-----	-----	-------	-----	------	-------	-----	------	------	------	------